

原爆投下時の広島別院



被爆前の広島別院本堂

広島別院は、現在地と同じ場所にあり爆心地から約1.1kmの地点になります。境内には本堂を中心に、庫裡や会館など木造平家建ての建物が並んでいました。本尊や仏具は、あらかじめ安佐町後山の本願寺道場へ疎開させており、境内には防空壕も設けていました。

8月6日、いつもの朝勤行の後、輪番室で話し合い中に被爆。本堂をはじめ建物はほぼ全壊しました。爆風と熱線で中庭の木々が燃えはじめ、職員が消火を試みましたが、火は瞬間に本堂へ延焼。皆、無我夢中で隣りに流れる本川へ逃げるのが精一杯でした。夕方ようやく鎮火しましたが、輪番ら5名が亡くなり、10名が負傷しました。

当時の副輪番は出張中で難を逃れ、8月10日に帰広。職員を集め、教務所を安芸郡坂町の西林寺に移します。その後同年12月には己斐町の善法寺へ移し、今後に向けて仮堂の建設を計画します。そして昭和21年5月、門信徒の寄付や勤勞奉仕によって、もとの焼け跡に仮堂が完成しました。

いまでも境内には損傷したままの納骨所の石碑や、枯れずに生き続けた蘇鉄の木が残っており、当時を語り伝えています。

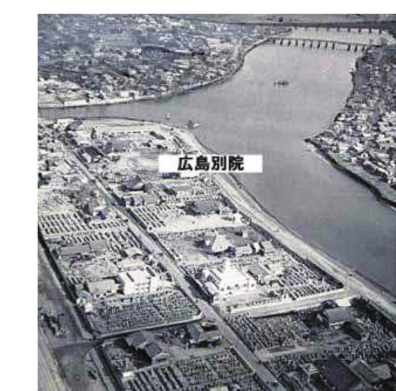
広島市の被爆寺院

被爆前、広島市内には仏教寺院が148カ寺あり、そのうち真宗寺院は78カ寺ありました。爆心地から半径2km以内の寺院はほぼ全焼、倒壊し、それ以外の地区においても半径5km範囲は爆風によりかなりの建物が被害を受けました。

2003年の調査によると*原爆で住職が亡くなった寺院は、35.8% (29カ寺)にのぼり、1カ寺の檀家あるいは門徒の死没者数が、100人を超えている寺院は38.3% (31カ寺)であり、さらに200人以上の寺院は、28.4% (23カ寺)にのぼります。この中には門信徒の死没者を700人以上生じた寺院が3カ寺含まれています。

本堂・庫裏の被害は全寺院が該当していますが、そのうち全壊・全焼寺院は63.0% (51カ寺)を占めています。寺院過去帳が全部焼失した寺院は30.9% (25カ寺)ありました。

*新田光子『原爆と寺院』法蔵館2004年発行



1960(昭和35)年ごろの寺町の様子